

技能実習生の言語使用に関する研究 —漁業に従事するインドネシア人技能実習生の 就労現場に注目して—

西村 愛

摘要

本文旨在探討從事漁業工作的印尼技能實習生，在日本勞動現場的語言使用情況，透過個別深度訪談與勞動現場參與觀察。研究顯示，在共同工作場域下的船員們，會透過語言以外的資源，例如周遭的事物，手勢，眼神，肢體等社會資源進行溝通活動。在漁業現場，由於船舶引擎聲與機械噪音等因素的影響，有時會出現非語言化的交流互動，本研究將此類互動定義為「靜默代碼」(silent code)。研究結果顯示，針對技能實習生的日語教育，除了教授「日語」本身外，更應將現場中實際需要且正在進行的「非」語言活動，反映到教育內容中，突顯此類教育的重要性。

要旨

本研究の目的は、漁業分野のインドネシア人技能実習生の就労現場における言語使用を明らかにすることである。インタビューや参与観察などによる調査の結果、作業の文脈を共有した乗組員たちは、「合言葉」などの社会的リソースを介して言語活動を行っており、ときに言語化されない「サイレントコード」によるやり取りも見られた。技能実習生への日本語教育はテキスト主体の教育だけでなく、現場で求められ、行われている言語活動を教育に反映させる重要性が示唆された。

キーワード

技能実習生、インドネシア、漁業、言語使用、合言葉

1. はじめに

本研究は、北海道の漁業分野に従事するインドネシア人技能実習生に焦点を当て、技能実習生の就労現場における言語使用を分析し、そこから技能実習生、とりわけ漁業に従事する人々の言語使用を明らかにしようとするものである。就労現場の言語使用の実際を捉えるため、現場に入り込みながら、半構造化インタビューや参与観察、言語使用意識調査など複数の方法でデータを収集する。そして、インドネシア人技能実習生と日本人乗組員が、どのような場面でどのような機能で言語を使用しているのかについて、岡本(1985)の「一次的事実と二次的事実」の概念のもと、分析を試みる。この知見から、技能実習生に対する「日本語」教育のあり方について論じる。

2. 先行研究と研究の目的

現在の日本における労働力不足の状況下で、外国人労働者の受け入れは着実に増加している。特に、1993 年に創設された外国人技能実習制度による外国人技能実習生、そして、2018 年に可決・成立した改正出入国管理法により、在留資格「特定技能」が創設され、2019 年 4 月に開始された在留資格「特定技能」外国人の受け入れは、近年、増加傾向にある。さらに、2024 年 6 月にはこれまでの制度を置き換える法案が提案され、2027 年より新しい制度のもとでの外国人労働者の受け入れが始まる。

これまでの技能実習生を対象とした研究には、技能実習生の日本語学習意識と学習環境に焦点を当てた中川・神谷(2017、2018)や、技能実習生に必要な日本語とは何かという切り口で日本語口頭能力アセスメント調査を行った真嶋(2021)などがある。しかし、技能実習生を対象とした研究は、いずれも日本語習得や日本語学習意識、日本語能力に関連したものであり、技能実習生が日常生活においてどのような言語を使用しているかが見えてこない。この点を明らかにしないことには、上記の研究で指摘されている技能実習生に必要な日本語や日本語教育の体制づくりを論じることはむずかしいと考える。

技能実習生を含む移住労働者の日本語使用に関する研究としては、飯田(2021)や菊岡・神吉(2010)などがある。飯田(2021)では、農業分野の技能実習生の調査を行い、技能実習生と日本語母語話者との協働現場において、技能実習生にリーダーを定めることでコミュニケーションが

円滑に進む事例や、技能実習生と日本語母語話者との一対一の密なやり取りによるコミュニケーションプロセスによって協働が成り立つ事例が紹介された。菊岡・神吉(2010)では、就労現場の日本語使用に関し、第二言語習得の観点から分析を行っている。本論では、菊岡・神吉(2010)で示された分析の枠組みを用いており、それらの詳細については、5章で記述する。

インドネシア人労働者やインドネシア人コミュニティについて研究したものに、奥島(2005a、2005b)や目黒(2005)があり、これらは「茨城県大洗町のインドネシア人労働者コミュニティ」のタイトルで特集化され、日本におけるインドネシア人の動向や労働市場への参入の特長について、日本の大洗というひとつのコミュニティを例に述べられている。奥島らによる研究は、大洗コミュニティの社会文化的背景を理解するために貴重な資料であるが、社会人類学や政策研究などを専門とする研究者によって行われたものであり、その中で「日本語」については具体的に述べられていない。同コミュニティの日本語習得を調査したものには吹原(2021)などがある。吹原(2021)では、労働場面や生活場面の参与観察を行い、インドネシア人移住労働者の日本語習得の促進・阻害要因を明らかにしている。

ここまで述べたように、インドネシア人労働者を対象とした研究は、多くが大洗コミュニティにおける研究であり、散在地域における研究はほとんどない。また、前述したように、技能実習生を対象とした研究の多くが「日本語」に焦点を当てたものであり、さらには、その多くが水産加工業や農業などの現場であることがわかった。日本語習得を目的として来日するのではない技能実習生にとって、「日本語」がすべてではない。注目すべきは、彼ら/彼女らの言語使用の実態である。技能実習生の言語使用の実態を明らかにすることで、技能実習現場でどのような日本語あるいは他言語による協働が求められているのか、そのためには、どのような教育が必要なのか、この点が見えてくると考える。全業種をカバーすることには無理があるものの、漁業に従事する技能実習生の実態を明らかにする意義はあると考える。

そこで、本研究では、北海道の漁業に従事するインドネシア人技能実習生の就労現場における言語使用を明らかにすることを目的とする。

3. 日本漁業と技能実習制度

農林水産省の「漁業センサス¹⁾」によると、漁業就業者²⁾は、調査開始時の最新情報である 2018

年時点で 151,701 人となっており、1988 年から 2018 年までの 30 年間で 61%減少している。平均年齢は 56.9 歳で、高齢化率(65 歳以上の割合)は 38.3%である。漁業就業者は著しく高齢化し、新規参入者の極端な減少により若い世代の漁業就業者は極めて少なく、日本漁業の次世代を担う人材が不足し、今後ますます減少することが予想される。そのような中で、外国人労働者、とりわけ技能実習生への依存がかなりのペースで拡大している。

漁業には、国内で操業する沿岸漁業や沖合漁業と、海外を基地とする遠洋漁業がある。漁船漁業において、技能実習生の送り出し国は、1993 年当時はフィリピンであったが、順次インドネシアやベトナムが加わり、その後漁船漁業での技能実習生は、全国的にインドネシアからの受け入れが増加した。

現在、沖合漁船漁業で働く技能実習生は、ほとんどがインドネシアの水産学校を卒業した者(全員が男性)で占められている。このような特徴が形成された理由としては、インドネシア全土には後期中等教育機関として水産教育を行う学校が整備されていることや、インドネシアの雇用状況が影響している。さらに、最近では、一般社団法人大日本水産会³によるインドネシアの漁業関係者に向けたワークショップの開催や、現地の人材会社がインドネシア政府(労働省、海洋漁業省)をはじめ、漁業関係団体や教育機関との関係づくりに力を入れ始めたことも大きく影響している。本研究の調査協力者も全員がインドネシアの水産学校を卒業しており、なかには、同じ学校を卒業したのち日本で再会し、同じ船で働く者もいる。

4. 研究の概要

4.1 調査対象

調査は、北海道において 2021 年 8 月～2022 年 9 月に対面形式で実施した。調査地では、かつての津軽藩の開拓や移住の影響があり、内陸に対して浜言葉と呼ばれる津軽方言が使用されている。

調査協力者は、「かに・えびかご漁業」に従事するインドネシア人技能実習生と、彼らと同じ船に乗る日本人乗組員である。

2022 年 1 月に、2 人の技能実習生(以下、表 1 で示すアフマドとウィルダシ)が帰国し、同年 6 月と 9 月にあらたな技能実習生が来るなどメンバーは代わったが、交流は続いた。本研究の中心

となる調査協力者は 4 人であるが、交流を通してつながった近隣地域の技能実習生や、新しく来日した技能実習生がいることもここで記したい。

技能実習生の詳細情報は、以下、表 1 にまとめる。なお、本論で使用する船名、人名はすべて仮名である。

表 1 技能実習生の情報

氏名	出身	年齢*	来日時期 (滞在年数*)	使用言語
アフマド	ジャワ島 西部ジャワ地域	24 歳	2018 年 11 月 (2 年 9 カ月)	日本語 インドネシア語 スンダ語
ウィルダン	ジャワ島 中部ジャワ地域	22 歳	2018 年 11 月 (2 年 9 カ月)	日本語 インドネシア語 ジャワ語
バユ	ジャワ島 中部ジャワ地域	20 歳	2020 年 1 月 (1 年 7 カ月)	日本語 インドネシア語 ジャワ語
ユダ	ジャワ島 中部ジャワ地域	20 歳	2020 年 1 月 (1 年 7 カ月)	日本語 インドネシア語 ジャワ語

*年齢、滞在年数については、調査開始時のものを示す。

「かに・えびかご漁業」の X 丸では、2016 年から技能実習生の受け入れが始まった。X 丸では、インドネシアの水産学校を卒業した者を優先的に受け入れており、本研究の調査協力者である 4 人のほかに、これまで 2 人の技能実習生を受け入れている。X 丸は大型船で最大 13 人が乗り、操業している。

乗組員は、操業全体の責任者である「船頭」や、運行の仕事をする「航海士」などそれぞれに

役割がある。当該漁船に乗り始めて間もない乗組員や技能実習生は「機関員(船員)」と位置づけられている。なお、X丸の特徴としては、乗組員の半数にあたる60代以上の乗組員が「機関員(船員)」として従事する一方で、20代～40代の「若い世代」の乗組員が何らかの役割を持って操業している点にある。本研究の調査協力者である船主(船の持ち主)と日本人乗組員4人については、以下、表2にまとめる。

表2 日本人乗組員の情報

氏名	年代	役割	その他
(本論中では「船主」と記す)	80代	船主、 水産加工会社社長	沖での操業には行かず、会社運営など主に事務作業を担当する。
田中	30代	機関長(運行の責任者)	X丸に最も長く乗る乗組員。
佐々木	20代	機関士(機関長の補助)	技能実習生アフマド、ウィルダンと同時期にX丸で働き始める。技能実習生が最も信頼を置く存在。
山本	30代	コック長(食事づくり)	佐々木の紹介でX丸で働く。
高橋	40代	機関員	佐々木の紹介でX丸で働く。

本研究では、エスノグラフィーを中心的な調査方法とし、具体的な研究目的に応じて、半構造化インタビュー、質問紙調査、参与観察法を組み合わせ、調査を行った。小田(2010)によると、「エスノグラフィーとは人びとが実際に生活したり、活動したり、仕事をしたりしている現場を内側から理解するための調査・研究の方法」である。本研究でエスノグラフィーを採用したのは、漁業に従事するインドネシア人技能実習生の言語使用を明らかにするためには、技能実習生が実際に生活したり、仕事をしたりしている現場を内側から理解する必要があると考えたからである。以下では、具体的な調査方法について述べる。

4.2 調査方法とデータ

半構造化インタビュー

技能実習生と日本人乗組員に対して行った。これは、調査の全般にわたって中心的に用いた手法である。いずれもあらかじめ大まかな質問を用意しておき、調査協力者の回答によって、さらに詳細に尋ねた。技能実習生へのインタビュー調査は、彼らにとって自由に使いこなせる言語であり、筆者との共通言語であるインドネシア語で行った。筆者が聞き取れなかったり、わからない語彙や表現があったりした場合は、翻訳アプリ(Google Translation や VoiceTra⁴)やインドネシア語による筆談を用いた。インタビューは、調査協力者の了承を得て録音した。技能実習生の受け入れや入国前後の状況などについては、録音したものを後で内容を確認しながら必要な個所を文字化してデータとした。技能実習生の言語使用に関する聞き取り結果は、録音した後、すべての音声を文字化した。日本語はそのまま文字化し、インドネシア語に関しては、聞き取ったインドネシア語の音声を日本語に翻訳した上で文字化を行った。本論では、インドネシア語で語られたものはそのままインドネシア語で記し、() 内に日本語の意味を記す。

質問紙法

技能実習生への質問紙による調査は、アンケート調査と言語使用意識調査の2つがある。アンケート調査は、年齢や出身など調査協力者のフェイス情報に関するものであり、調査開始時に行った。言語使用意識調査は、自宅やスーパーマーケットなどの生活場面と就労場面という言葉使用領域に分けて質問した。それぞれの言語使用領域は、対話者と場所、トピックで構成されている。対話者やトピックが同じであっても、対面での会話や SNS のチャットを用いた会話、電話での会話など場面が異なる場合、使用言語が異なる可能性がある。技能実習生の微細な場面での言語使用を明らかにするため、項目を細かく分けて質問した。なお、言語使用意識調査を行うまでの交流や調査の段階で、技能実習生の主な使用言語がインドネシア語、インドネシアの地方語⁵(6章2節で詳述する)、日本語であるとわかっていたため、言語の欄には、上記の3言語を記した。アンケート調査、言語使用意識調査のいずれも筆者が同席し、インドネシア語で読み上げながら質問した。質問紙調査の際も、調査協力者の了承を得て録音した。アンケート調査は、技能実習生が各自インドネシア語で記入したが、言語使用意識調査は、筆者が聞き取ったインドネシ

ア語をそのまま記入、あるいは一部日本語でメモ書きするかたちをとった。

参与観察法

先に述べたように、本研究では、人を人だけでなく、場も含めて理解することに適したエスノグラフィーの手法を意識して調査を行った。半構造化インタビューは、筆者の問いかけに答えてもらったり、語ってもらったりする点に合理性があると判断し、本研究の主要な方法としたが、インタビュー調査だけで技能実習生の言語使用を捉えるには限界があると考えた。このような理由から、筆者自身が場面に加わり、観察する参与観察法を半構造化インタビューと並ぶ方法として位置づけた。

4.3 調査者の立場

質的研究において、フィールドへの参与の深さによって調査者はさまざまな立場に分類される。文化人類学者の箕浦(1999)は、人々が生きている意味世界を一人ひとりの行動や語りなどに注目して読み解く「マイクロ・エスノグラフィー」での調査者の関わり方を4つの立場に分類した。それは①完全な参与者(complete participation)、②積極的な参与者(active participation)、③消極的な参加者(passive participation)、④観察者役割のみ(observer role only)の4つである。

本研究では、参与観察の場面に応じて筆者の関わり方が異なる。本論では詳述しないが、例えば、生活場面であれば、フィールドの周辺的な立場から調査するのではなく、「調査者」である筆者も「積極的な参与者」として、技能実習生や技能実習生の周囲の人々とも積極的に関わりながら調査を行った。一方で、就労場面の参与観察では、調査協力者やそのほかの乗組員の作業に影響を及ぼさないよう、さらには安全を確保する必要があったため、「消極的な参加者」として関わるなど、その場面に適した参与の方法をとった。

5. 分析方法

就労現場では、技能実習生と日本人乗組員の間で使用される言語のほとんどが日本語である。日本語がどのような場面でどのような機能で使われているかを捉えるため、岡本(1985)の「一次的事ことばと二次的事ことば」の概念を用いた。

岡本(1985)によると、「一次的事ば」とは、状況的文脈や行動文脈などことばの背景となる文脈を共有する「特定の親しい人」の間で用いられる話しことばである。一方、「二次的事ば」とは、文脈を共有しない「不特定多数者」との間で用いられる、ことばの文脈に支えられたことばであり、それにはさらに書きことばや書きことば的話しことばが加わる。また、「一次的事ば」が、「文脈を共有する者の間のことばであることから、簡略化され、時に文法的には不十分な形でも、他の社会的リソースに補われることで十分にことばとして機能する」のに対し(菊岡・神吉 2010:131)、「二次的事ば」は、文脈を共有しない不特定多数者へのことばであり、さまざまな言語的リソースを要することが指摘されている。つまり、「一次的事ば」と「二次的事ば」とは、文脈の共有、非共有に基づく言語活動の構成を示す概念だと考えることができる。

さらに、この「一次的事ば」の特徴をもったものとして、言語活動を補完する 3 つの社会的リソースを提示したのが、菊岡・神吉(2010)である。菊岡・神吉(2010)では、作業現場における言語活動は、文脈を共有した作業員同士が、言語以外のさまざまな物、身体的行為、共有の経験や知識といった社会的リソースを介して達成されると述べられている。以下では、その 3 つの枠組みである(1)活動を取り巻く物や行為、(2)共有の経験、(3)共有の知識について述べる。

菊岡・神吉(2010)では、製造関係の工場における外国人従業員と日本人従業員の言語活動を分析している。(1)活動を取り巻く物や行為とは、作業で用いる「機械」と「機械に部品を取り付ける行為」である。活動を取り巻く物や行為を共有した言語活動においては、「これ」「ここ」などの指示代名詞が使用されるとされ、指示代名詞の内容がそれ以上に言語化されずとも十分に作業方法の指示を行うことが可能であると指摘されている。

(2)共有の経験では、「さっきの」という発話を取り上げている。「さっきの」が指す対象を作業員同士が共有している経験があることで、「さっきの」という言語化以上の具体的説明がなくとも言語活動の達成が可能になると述べられている。

(3)共有の知識に関しては、「674(ろくななよん)」という数字や「KHY(けーえいちわい)」という記号が取り上げられ、工場内においてこれらの数字や記号が示す意味を共有しているからこそ、言語活動が可能になるとしている。

さらに、共有の知識については、バフチン(1979)の概念を援用しながら論じられている。バフチン(1979)では、共有の知識のような文脈を共有する者同士の会話の場合、「すでに意味交渉が

なされた言葉の意味は、もはや表面的には言語化されなくなる『合言葉』という現象が生じる」ことが指摘されている(菊岡・神吉 2010:135)。「合言葉」は、そのことばが示す対象だけではなく、それが「合言葉」となる過程で言語化されなくなった経験も含まれている。さらに、「合言葉」が繰り返し用いられることで、特定の活動や実践を共有する者同士で使用される「社会的言語」(バフチン 1988)となるとしている。菊岡・神吉(2010)では、前述した「674(ろくななよん)」という数字や「KHY(けーえいちわい)」という記号は、作業の知識や経験を内包し、安定した意味を示していることから、当該企業の「社会的言語」(バフチン 1988)であると指摘している。

菊岡・神吉(2010)の特長は、第二言語習得の先行研究で生じた問題意識に関し、外国人従業員と日本人従業員の作業現場でのフィールドワークを通して得たデータをもとに明確な答えを与えている点にある。本論で述べるインドネシア人技能実習生と日本人乗組員の就労現場の言語活動についてもまた、菊岡・神吉(2010)で示された3つの社会的リソースの観点を用い、分析を行うことで対象の理解に有効であると考えられる。

6. 分析と考察

6.1 技能実習生の言語使用意識の実態

技能実習生の言語使用について詳述する前に、インドネシアの「地方語」について述べたい。インドネシアでは、500以上の言語が話され、そのうちの14の言語は話者人口が100万人を超えており(Sneddon 2003:197-198)、国語であるインドネシア語のほかに多くの地方語が日常的に、より私的な空間において使用されている。地方語とは、ここでは、ジャワ語やスダ語などのインドネシアの各地方で話されている言語のことを指す。「母語」(インドネシア語では bahasa ibu と表記される)や「日常語」(インドネシア語では bahasa yang dipakai sehari-hari と表記される)のはっきりとした定義は説明されていないが、母語人口は、インドネシア語よりもジャワ語のほうが多く、2010年のセンサス⁶によると、インドネシア語を「日常語」として使用しているインドネシア人は約19%となっている。

X丸の技能実習生を見ていくと、調査開始時の技能実習生間の共通言語はインドネシア語であった(表1参照)。しかし、スダ語話者のアフマドの帰国後、彼らの共通言語はジャワ語に変化した。ジャワ語がわからない筆者がいる場面では、技能実習生はインドネシア語を使用し、コミュ

ニケーションをとっていた。彼らは、町内の技能実習生同士に限らず、近隣地域、あるいは同職種のインドネシア人同士であれば、地方語であるジャワ語を使用することが多い。これは、彼らにとってジャワ語をはじめとする地方語が「母語」であり、それらが最も自由に感情を表現できる言語であるからだと考えることができる。

言語使用意識調査で日本語使用に関して具体的に質問したところ、X 丸の技能実習生 4 人に共通した回答が見られた。それは、“Bahasa Jepang sama orang Jepang aja”（日本語は日本人とだけ使用する）との回答である。技能実習生同士や、母国の家族や親族、友人とは地方語やインドネシア語を使用するため、日本語使用は、仕事中に日本人と話すときだけだとの意識があることがわかった。

しかしながら、調査を進めると、彼らの言語使用意識とは異なる実態が見えてきた。そのひとつの例が、SNS のチャットにおける言語使用である。以下は、X 丸の技能実習生アフマドが、僚船⁷の技能実習生とやり取りした内容である。

事例 1 僚船の漁獲量を尋ねるとき

アフマド	: Nnko (何個)
僚船の技能実習生	: 120 (120: 獲れたかにを入れるかごの数)

事例 1 では、アフマドが、別の漁場で操業する船の技能実習生に対し、「かにがどのくらい獲れているか」を“Nnko”（何個）という聞き方で尋ねている。インドネシア人技能実習生のチャットのやり取りであるが、アルファベットで日本語の発音を表記している。さらにほかの場面でも、“nani”（何）や“doko”（どこ）など、疑問詞の使用において、アルファベットを用いて日本語を表していた。技能実習生同士のやり取りにも関わらず、ジャワ語、あるいはインドネシア語を使用しない理由としては、就労現場で協働する日本人乗組員とは日本語を使用しているため、その影響がチャットでの言語使用にも表れていることや、“Nnko”は就労現場において使用頻度が高いから、などということが考えられる。

なお、この場面において、アルファベットを用いて日本語の発音を示すことを、技能実習生自身が「日本語を使うこと」と判断しない理由は、彼らにとっての「日本語使用」は、「日本語の単語を発話すること」であるからだと考える。この考えを補強する例として、事例 2 を見ていく。事例 2 は、事例 1 同様、技能実習生アフマドが近隣の技能実習生とチャットでやり取りをしている場面である。事例 2 では、近隣の技能実習生が、アフマドたちが生活する町に遊びに行きたいことを伝えている。

事例 2 予定を尋ねるとき

近隣の技能実習生	: mau ke [町名] ([町名]に行きたい)
アフマド	: itsu (いつ)
近隣の技能実習生	: itsu dekiruka
アフマド	: itsudemo daijobu himadakara (いつでも大丈夫 ひまだから)

事例 2 で興味深いのは、インドネシア語と、アルファベットで示された日本語が混在している点である。アフマドがアルファベットで日本語を使用したことを機に、相手の技能実習生もアルファベットで日本語を使用している。この場面では、事例 1 の“Nnko”よりも単語数が増え、アルファベットによる日本語の発音の表記ではあるが、日本語を使った文のやり取りをしていることがわかる。しかし、アフマドの意識としては、これらは「日本語使用」ではない。事例 1 や事例 2 のような例は、アフマドだけではなく、X 丸のほかの技能実習生も同様であることが、言語使用意識調査からわかっている。

このようなことから、技能実習生にとって「日本語を使うこと」とは、日本語が音声として言語化された場合を指すのであり、SNS のチャットなどで用いられるアルファベットで示された日本語は、彼らの意識として「日本語を使うこと」には含まれていないことがわかった。

6.2 X 丸における言語使用の概要

「かに・えびかご漁業」に従事する技能実習生の言語使用を分析する際、留意すべきは、周囲の騒音や人的距離などの環境要因である。X 丸の就労現場は、船のエンジン音や作業で使用する機械音、周囲で作業をするトラックのエンジン音などがある状況下での作業になっている。本研究では、就労場面の参与観察の際、可能な範囲でスマートフォンのアプリケーション「デシベル X⁸」を用いて音量を計測した。騒音調査サービスを提供する日本騒音調査ソーチョーによると、木の葉の触れ合う音やささやき声などは 20dB、洗濯機や掃除機の音は 60dB、電車が通るときのガード下では 100dB、自動車のクラクション音などは 110dB とされている。X 丸のエンジン音を計測したところ、およそ 90dB であり、これは、日本騒音調査ソーチョーが示すブルドーザーの作業音や、カラオケ店(店内中央)の音量に値する。X 丸の沖合での操業や、係留時の作業の際は、上記で示したエンジン音、さらには、作業で使用する機械音、周囲の作業音がある環境での言語使用となる。

次に、X 丸の就労形態について述べる。技能実習生全員が同時に漁港へ出勤、退勤し、工作中は、X 丸の日本人乗組員の指示のもとで協働している。また、一度沖に出ると、2～3 日漁港へ戻ってこない場合が多い。

X 丸では、作業内容の多くが毎日繰り返し行われるものであり、新しい仕事を覚えることはほとんどないという。しかしながら、いつもと異なる漁場での作業や、イレギュラーな作業内容に関しては、日本人乗組員から技能実習生へ指示が出される。その指示の多くは、日本人乗組員佐々木から出される。佐々木は、技能実習生アフマドとウィルダンと同時期に X 丸で働き始めた同期にあたり(表 2 参照)、技能実習生と同年代であること、「世話好き」であることなどから、技能実習生への指示出しや世話を担当することになったという背景がある。なお、技能実習生 4 人のうち、「日本語ができる」と評価されるアフマドは、「通訳」の役割を担うこともある。そのため、X 丸におけるコミュニケーションは、日本人乗組員佐々木と、技能実習生アフマドを中心に行う場合が最も多い。佐々木が全体的な指示を、特にリーダーであるアフマドに対して出し、リーダーに指示が伝わるまで日本語でのコミュニケーションを続ける。そして、ほかの技能実習生が佐々木からの指示を理解していない場合は、リーダーであるアフマドから、ほかの技能実習生に対してインドネシア語で指示が伝えられる。調査開始当時、最も技能実習歴が長く、「日本語ができる」と評価されていたア

フマドがリーダーであったが、これは、飯田(2021)で述べられていることと一致する。

飯田(2021)では、いちご農家で働く技能実習生を対象に調査が進められており、技能実習歴の長い先輩格の技能実習生がリーダーとなっていた。同じ時期に複数の技能実習生がいた場合には、日本語能力やコミュニケーション能力が高い技能実習生がリーダーとなると述べられている(飯田 2021:37)。X 丸においても、技能実習歴の長いアフマドとウィルダンのうち、「日本語ができる」と評価されるアフマドがリーダーとなり、協働していることがわかった。調査期間中、リーダーであるアフマドの帰国があり、X 丸ではリーダーの引き継ぎが心配された。飯田(2021)で示されたいちご農家では、リーダーの交代は、リーダーの帰国とともに行われ、同じ時期に人員確保のために新しい技能実習生がやってくるというサイクルになっている。

しかしながら、X 丸の場合、リーダーであったアフマドの帰国後、約 4 カ月間は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、新たな技能実習生は訪れず、バユとユダのみであった。そのような場合において、バユとユダのどちらかにリーダーを任せるという選択肢は取られず、日本人乗組員からの指示は、バユとユダ、2 人に向けて出されていた。なお、2022 年 6 月に新たな技能実習生がやってきた際は、作業内容がバユとユダからインドネシア語とジャワ語で引き継がれていた。このように、X 丸において、技能実習生の出身が同じインドネシアであること、技能実習生間では共通言語(インドネシア語やジャワ語)によるコミュニケーションが可能であることから、作業内容の指示の共有が比較的スムーズに行われている。

技能実習生間のコミュニケーションがスムーズに行われている一方で、日本人乗組員は、日本人乗組員と技能実習生との間で指示が通らなかったり、意思疎通がむずかしかったりすることがあるかという質問に対し、あると回答している。その具体的場面について、次節で述べる。

6.3 沖合での操業中の作業

X 丸の沖合での操業中の主な作業としては、水揚げ作業、漁獲物の処理作業(性別分け、種類分け、サイズ分け、鮮度保持、温度管理など)、投げかご作業などがある。仕掛けたかごの目印である「ボンデン」と呼ばれる漁具を目指して操業が始まり、目的地に到着したら水揚げ作業が始まる。その後、漁獲物の処理作業を行い、あらたな投げかごと、その目印になるボンデンを設置して漁港に戻るという一連の流れになっている。ボンデンを設置する作業は、通常、日本人乗組員

が行っているが、ある日の操業では、ボンデンを投げる位置のすぐ近くにいたバユに、ボンデンを投げ、設置するよう佐々木から指示が出た。いつもと異なる作業に関する指示であったためか、佐々木の指示はバユにスムーズには伝わらなかったという。スムーズに指示が通らない場合、日本人乗組員はどのように対応するのか、日本人乗組員の言語使用を探るために佐々木に尋ねた。

佐々木は、まず「投げれ」と2回ほど伝えた。それでも伝わらなかったため、「ボンデンば投げれ、振り回して投げれって(近くにあったペットボトルをボンデンに例え、振り回しながら)」と言ったという。上記のボンデンを投げる作業だけではなく、作業内容の指示が通らない場面において、日本人乗組員は指示が伝わるよう工夫して対応していることがわかった。この点に関し、ほかの日本人乗組員へもインタビュー調査を進めると、作業内容の指示がスムーズに通らない場面における共通した対処方法が見えてきた。それは、①繰り返し指示を出す(ここでは、日本人乗組員全員が「もう一回同じことを言う」と述べている)、②ゆっくり、大きな声で話す、③例を示す、などという対応である。これらは、①から③の順番で行われることがほとんどであり、例を示す際は、上記の佐々木のように、近くにある漁具やペットボトルなど言語以外のさまざまな物を用いて例を示していることがわかった。

次に示すのは、筆者が参与観察を行ったX丸の出航前の「氷積み作業」と、帰港後の「荷揚げ作業」の言語活動である。氷積み作業と荷揚げ作業を参与観察した理由は、技能実習生と日本人乗組員のインタラクティブなやり取りを観察するためには、この2つの場面が適していると考えたからである。氷積み作業と荷揚げ作業では、作業の流れを乱さないよう、箕浦(1999)が分類する「消極的な参加者」の立場で参与観察を行った。就労現場における言語活動は、5章で述べた菊岡・神吉(2010)の枠組みを用いて分析する。

6.4 港での氷積み作業

はじめに、「氷積み作業」を分析する。氷積み作業とは、出航前に港で船に氷を積む作業であり、午前4時頃から始まる。「氷積み作業」では、港に係留している船の上での作業と、船から50メートルほど離れた場所にある製氷機付近での作業がある。筆者は主に、技能実習生ウィルダンとユダが作業をしていた製氷機付近での作業を参与観察した。製氷機付近では、製氷機からかごに氷を入れ、氷が入ったかごを、パレットと呼ばれる土台に並べる作業がある。1つのパレットに

15 のかごを並べ、それを日本人乗組員が運転するリフトで船まで運ぶという一連の流れになっている。

以下はリフトを操縦し、パレットを取りに来た日本人乗組員佐々木とウィルダンの会話である。ここでは、菊岡・神吉(2010)で述べられている言語活動を補完する社会的リソースのうち、「共有の知識」、「共有の経験」の 2 つが観察された。氷積み作業における言語活動は、さまざまな社会的リソースを活用することで、言語的リソースが簡略化されるという「一次のことば」の特徴に合致するものであった。

事例 3 共有の知識と共有の経験の活用

佐々木	:10 ヤマ
ウィルダン	:うん、10 ヤマ
佐々木	:あっち、あっちもってって

「ヤマ」とは、ここでは 10 のかごを並べ重ね、10 段つくる意味である。ここで佐々木は、氷を入れたかごを 10 段にし、パレットに並べ重ね、「あっち」に持っていくようウィルダンに指示している。佐々木の「10 ヤマ」という発話に対し、ウィルダンが了解を示す「うん」を用いて応答していることから、「ヤマ」が示す意味を共有していることがわかる。要するに、X 丸において「ヤマ」ということばの意味は、すでに意味交渉がなされており、表面的には言語化されなくなる合言葉(バフチン 1979)として機能している。また、かごを並べ重ねる際、合言葉である「ヤマ」が繰り返し用いられ、X 丸における作業の知識や経験を含み安定した意味を示している点から、「社会的言語」(バフチン 1988)であると考えられる。

さらに、「共有の経験」の活用例として、同じ場面の「あっち」に注目したい。ここでは、佐々木とウィルダンが互いに共有していると思われる経験が利用されている。ウィルダンが、佐々木の言う「あっち」が指す方向や場所について共有していなければ、ウィルダンは「どこのことを言っているのか」聞き直す必要があったはずである。しかし、佐々木が示す「あっち」がどこであるか、指差し

などのジェスチャーがなくても作業が達成できている。このように、共有の経験もまた、「あっち」という言語化以上の具体的説明がなくとも、言語活動を可能にするのである。

また、ここで注目したいのが、「場面における共有の経験」である。菊岡・神吉(2010)では、言語活動を補完する社会的リソースとして「共有の経験」があるが、本研究では、どの場面における共有の経験であるのか、場面が重要であると考ええる。前述した「あっち」は、製氷機付近での氷積み作業という場面において、「あっち」が指す場所が共有されている。X 丸の場合、沖での操業時、係留中の船上での作業時、そして製氷機付近での作業時などさまざまな場面がある。このような就労環境の場合、「場面における共有の経験」に留意しながら分析をする必要がある。

なお、就労現場で使用される言語は、日本語だけではない。事例 4 では、技能実習生ウィルダンとユダの発話を取り上げる。2 人の会話ではインドネシア語が使用されていたため、以下でもインドネシア語で記す。()で日本語の意味を記している。

事例 4 インドネシア語の使用

ユダ : udah, udah habis(もうない)

ウィルダン : siap(わかった)

ここでユダは、製氷機から出てくる氷がすでになくなったことをウィルダンに伝えた。製氷機の操作をしているウィルダンは、ユダの発話を聞いた後、製氷機のボタンを押し、作業を続けた。上記のように、インドネシア人同士であれば、インドネシア語を使用して作業をしていることがわかった。

また、ウィルダンが操作していた製氷機には 4 つのボタンがあり、それぞれのボタンには日本語が書かれていた。日本語の意味を理解しているのか筆者がウィルダンにインドネシア語で質問したところ、“Bahasanya tidak tahu, melihatnya caranya”(ことばはわからないが、やり方だけ見て覚えている)との回答があった。製氷機の操作など繰り返しの作業に関しては、やり方を覚え、視覚情報だけで作業内容を理解していることがわかった。

6.5 港での荷揚げ作業

荷揚げ作業では、大きく分けて 3 つの作業がある。ひとつは、船の甲板⁹で魚倉¹⁰から、ロープを使いかにかが入ったかごを引っ張る作業、そしてそのかごをトラックの荷台へ積む作業、もうひとつは、トラックの荷台でかごを受け取り、重ねたり並べたりする作業である。

事例 5 では、「活動を取り巻く物や行為」が言語活動を補完する例を見ていく。事例 5 は、日本人乗組員佐々木が、技能実習生ユダに手カギを取るようお願いしている場面である。手カギとは、荷物や漁獲物を運搬するときにひっかけて使われる道具である。佐々木とユダは、トラックの荷台に立ち、かにかごを受け取る作業をしている。荷台には、手カギのほかにもロープなどの道具があったが、ユダはジェスチャーなしのやり取りにも関わらず、すぐに佐々木に手カギを手渡した。これは、活動を取り巻く物である「手カギ」と、それをどの場面で使うかという「行為」を共有しているからこそ達成された言語活動であると言える。

事例 5 活動を取り巻く物や行為の活用

佐々木 : それ、ちょうだい

ユダ : (荷台にあった手カギを取り、佐々木に渡す)

同じく、活動を取り巻く物や行為を共有した例を見ていく。事例 6 では、船の甲板に立っている高橋がバユに「あれ」を出すように指示している。「あれ」とは、かにかごを示している。日本人乗組員によると、作業終盤に魚倉に残っているかには、売り物にできないものであり、それらは乗組員が安く購入する人が多い。事例 6 のようなやり取りは、荷揚げ作業終盤でよく行われる行為である。日常的に行われる「かにかご」という物を「魚倉から出す」という行為が、荷揚げ作業の終盤という場面において共有されているからこそ、このような言語活動が可能になっている。

事例 6 活動を取り巻く物や行為の活用

高橋 : バユ、あれ出して
バユ : (魚倉からかにかごを出す)

また、活動を取り巻く物や行為が言語活動を補完する場面で見られるのは、「それ」、「あれ」などの指示代名詞の使用である。このような場合、指示代名詞が指し示すものが言語化されることはない。しかしながら、事例 5 でユダが、事例 6 でバユが理解を示し作業をしているように、十分に作業内容の指示を行うことが可能である。これは前述した菊岡・神吉(2010)の現場と同様と言えよう。袴田(1999)では、外国人作業員のいる工場において、「指導する立場であるか、指導される立場であるかに関わらず、コ系現場指示代名詞が最も多く使用されている」との指摘がある。工場での作業において、コ系の使用が多い理由は、「具体的な部品名よりも、『コレ』、具体的な作業名よりも『コウ(する)』を使用する傾向」があることが挙げられる(袴田 1999:79)。これらは、工場の中でも製造組立ラインでの作業という限られた環境であるがゆえにコ系が多用されていると考えることができる。

ここで指摘したいのは、X 丸の場合、指示代名詞の使用はコ系に限らずさまざまであるということ、そして指示代名詞には、ある場面において特定の意味が結びついているということである。事例 5 では、荷揚げ作業中、トラックの荷台でのかにかごの受け渡し作業という場面に、指示代名詞「それ」の意味が結びついている。事例 6 では、荷揚げ作業終了時、船の甲板という場面において、指示代名詞「あれ」の意味が結びついている。ある場面において、何らかの指示代名詞を使用することは、特定の意味として機能していると言える。つまり、たとえコ・ソ・ア・ドの使用に誤りがあったとしても、作業内容に関する意味は通じ、言語活動は達成される。これは、X 丸の荷揚げ作業という場面において、「それ」、「あれ」などが指示代名詞の機能を果たしているというよりも、前述したように「合言葉」(バフチン 1979)として機能しているからだと考えることができる。

次に、荷揚げ作業における共有の知識、共有の経験の活用例を見ていく。事例 7 では、日本人乗組員佐々木が技能実習生アフマドに対し、トラックの荷台にかにかごがいくつ積んであるか

を尋ねている場面である。

事例7 共有の知識と共有の経験の活用

佐々木	: アフマド、なんぼ
アフマド	: (かにかごの数を数えて) 22、31、21
佐々木	: 22、31、21 な

「なんぼ」は、広辞苑によると、「どれほど、いくら」という意味があるが、外国人技能実習制度の日本語講習のような、日本語教育の初期段階で取り上げられる語彙ではないように思い、作業終了後、アフマドに「なんぼ」の意味を理解しているのか尋ねた。アフマドは、“Artinya tidak tahu, tapi jika ditanya, saya menjawab nomor” (意味はわからないが、なんぼと聞かれたら、数を答えている) と述べていた。これは、荷揚げ作業中のトラックの荷台という場面において、「なんぼ」ということばは、すでに意味交渉がなされた「合言葉」として機能していると考えることができる。さらに、同様の場面において繰り返し用いられることで、かにかごの数を答えるという意味を持つ「社会的言語」となっていることがわかる。

ここまで日本人乗組員と技能実習生とのやり取りを取り上げたが、以下では日本人乗組員同士の言語活動について述べる。前述したように、荷揚げ作業では、船の甲板で、魚倉からロープを使いかにかごを引っ張る作業があるが、このロープの作業は、日本人乗組員山本が機械のリモコンを操作し、行っていた。かにかごを引っ張ったり、トラックの荷台に積んだりする日本人乗組員は、山本の操作を確認しながら作業をしている。事例8は、日本人乗組員高橋が、かにかごが斜めにならないよう、「まっすぐ」と人差し指を上に向け、山本に指示出しをしている場面である。

事例 8 日本人乗組員同士のやり取り

高橋 : まっすぐ、まっすぐ(人差し指を上に向ける)
山本 : (ロープの操作をしながら「うん」とうなづく)

事例 8 では、高橋はトラックの荷台前に立っており、山本は、高橋から 5m ほど離れた魚倉付近に立っている。高橋は「まっすぐ、まっすぐ」と声を出し指示出しをしているが、この場面ではロープの機械音やトラックのエンジン音が大きく、高橋の声が山本に届いていない。しかし、高橋の人差し指を上に向けるというジェスチャーを通して山本に指示が通り、作業が円滑に行われている。この場面の騒音を計測したところ、ロープの機械音が最も大きく、およそ 100dB (前述した例を出すと、電車が通るときのガード下の騒音に相当する) であった。

事例 8 は、ジェスチャーを用いることで指示が通った例であるが、以下では、周囲の騒音や乗組員の物理的距離の影響で言語活動が円滑に行われなかった例を取り上げる。事例 9 もまた日本人乗組員同士のやり取りである。事例 9 では、事例 8 で登場した山本と高橋の立ち位置に変化はない。魚倉付近でロープの操作をする山本と、山本から 5m ほど離れたトラックの荷台付近にいる高橋、そして高橋よりもさらに 1m ほど山本から離れた場所で全体の指揮をとる船頭のやり取りである。船頭とは、X 丸の操業全体の指揮をとる人物であり、X 丸の船主とは異なる。日本人乗組員の多くが苗字やニックネームで呼び合う一方で、船頭は役職名である船頭と呼ばれている。

事例 9 は、かにかごがあといくつ必要か、山本が船頭に尋ねるが、ロープの機械音やトラックのエンジン音で船頭に声が届かない場面である。なお、このとき、機械に最も近い位置にいたのが船頭であるため、船頭付近は、筆者が計測した 100dB 以上の騒音環境であったと予測できる。前述した山本が 3 回目に尋ねたとき、船頭よりも 1m ほど山本の近くで作業をしていた高橋が気づき、船頭に伝えた。また、高橋は船頭の回答を山本に伝える際、声を発さずジェスチャーを用いていた。このように 1 艘の船の上での作業でありながらも、騒音や立ち位置によって言語活動が円滑に進まない例も見られる。

事例9 日本人乗組員同士のやり取り

山本 : 船頭、なんぼ
(船頭に聞こえていない)
山本 : 船頭、なんぼだや
山本 : 船頭、なんぼ
高橋 : 船頭、なんぼだと
船頭 : あと10
高橋 : (山本に向かって両手で10を示し伝える)
山本 : 10 な

さらに、以下では、作業に関するやり取りが言語化されなかった例を取り上げる。言語に頼らないコミュニケーションとしては、非言語コミュニケーション(ノンバーバル・コミュニケーション)があるが、本論で示す言語化されなかった例は、非言語コミュニケーションによって表されるものとは異なる。本論で取り上げる言語化されない作業に関するやり取りとは、非言語コミュニケーションと比較して、より場面に依存したものであり、言語を伴わない指示である。本研究では、それらを「サイレントコード」と定義づけた。「サイレントコード」の事例を示す前に、ここでの「コード」の定義を確認したい。Bernstein(1971)によると、コードには、精密コード(elaborated code)と限定コード(restricted code)のふたつのタイプがある。精密コードによって発せられる言語は、文脈への依存度が弱く(状況独立的)、限定コードによって生み出される言語は、文脈への依存度が強い(状況依存的)とした。Bernstein(1971)は、労働者階級の子どもは限定コードによって言語を使用し、中産階級の子どもは精密コードによって言語を使用していることを指摘している。学校教育においては、限定コードよりも精密コードの使用が要求されることが多く、精密コードに馴染みがない労働者階級の子どもは、学校で成功をつかみにくいと主張した(Bernstein 1971:150-152)。本論で用いる「コード」ということばは、Bernstein(1971)で示された概念のもと、文脈への依存度が強い「限定コード」の特長をもったものを指す。

X 丸の就労現場においては、いくつかの場面で「サイレントコード」の使用が見られた。事例 10 は、日本人乗組員田中と技能実習生ユダの荷揚げ作業中の様子である。ここでは、両者はことばを発していない。しかしながら、荷揚げ作業のある場面において、ひもを渡されたユダは、自分が何をすべきかを判断し、トラックの荷台に積まれたかにかごを縛っている。この作業は、X 丸の荷揚げ作業において繰り返し行われる作業であるからこそ、言語化されなくとも作業内容の指示が通っていることがわかる。

事例 10 サイレントコードの使用

田中 : (ひもを渡す)

ユダ : (ひもを受け取り、荷台に積まれたかにかごを縛る)

サイレントコードのほかの使用例には、日本人乗組員が技能実習生にことばを発さずにかにかごを渡し、それを受け取った技能実習生が、かにかごが並べられた場所に持っていく並べ重ねる例や、同じく日本人乗組員が技能実習生にテープを渡し、それを受け取った技能実習生が、かにかごにテープを貼り付ける作業などがある。また、日本人乗組員と技能実習生のみならず、日本人乗組員同士の作業でもサイレントコードが多用されていた。これらはすべて作業中のある場面において一対一で行われるやり取りであり、ある場面で共有された経験や知識を含むという場面に頼るかたちで作業が達成されている。いずれの作業もトラックのエンジン音や甲板にあるロープの機械音など周囲の騒音が大きく、このような環境もまた、サイレントコードが使用される要因であると考えられる。

7. まとめ

本研究は、北海道の漁業に従事するインドネシア人技能実習生の就労現場における言語使用を明らかにすることを目的とした研究である。「かに・えびかご漁業」に従事するインドネシア人技能実習生 4 人、彼らと協働する日本人乗組員(船主を含む)を調査協力者とし、インタビュー調査、

参与観察、言語使用意識などに関する質問紙調査を実施し、そのデータをもとに分析、考察を試みた。

技能実習生や彼らと協働する日本人乗組員の言語使用の実態に関しては、エスノグラフィーを中心的な調査方法としながら、技能実習生と日本人乗組員らが生活、協働する現場に入り込みながら、実際の言語使用やその場で起こったことを記録してきた。それに加え、技能実習生には主にインドネシア語を用いて言語使用意識に関して質問紙調査を行い、データを収集した。それにより、微細な場面における言語使用の実態が確認できた。

6章では、就労現場の言語使用に関し、岡本(1985)の「一次的ことばと二次的ことば」の概念や、菊岡・神吉(2010)の「活動を取り巻く物や行為」、「共有の経験」、「共有の知識」といった就労現場の言語活動を補完する社会的リソースの枠組みを用いて記述を試みた。

その結果、就労現場においては、作業の文脈を共有した乗組員たちが、周囲にある言語以外のものやジェスチャー、ある場面において共有された経験や知識などの社会的リソースを介して言語活動が達成されることが明らかになった。そこで用いられる日本語は、すでに意味交渉がなされたことばである「合言葉」として機能し、ときには、言語化がされない「サイレントコード」として登場することもわかった。また、「かに・えびかご漁業」のX丸における氷積み作業や荷揚げ作業では、「合言葉」が繰り返し用いられることで、その作業場面において安定した意味を示す「社会的言語」として機能していることもわかった。上記で述べたさまざまな社会的リソースを介する言語活動は、技能実習生と日本人乗組員とのやり取りだけではなく、日本人乗組員同士にも見られた。これは、漁業という職種において作業内容がおおよそ決まっていること、船のエンジン音や作業に使用するロープの機械音などの環境要因が関係し、言語化されるものが限られていること、さらには、ジェスチャーなどが重要な役割を持つことなどが理由として挙げられる。また、日本人乗組員は、技能実習生にスムーズに指示が通らない場合には、繰り返し指示を出したり、例を示したりし、対応していることがわかった。

技能実習生にとって日本語は、当該地域で生活する上で必要な言語であり、就労現場においても必要不可欠な言語である。しかしながら、X丸においては、高い水準の日本語が求められることはなく、限られた語彙、表現の使用を通して言語活動が可能になっている。インドネシア語や地方語は、技能実習生をつなぐ共通言語であり、かつ、彼らが自由に自己を表現できる言語である

ことがわかった。

技能実習生に関する日本語教育については、現場で求められるコミュニケーション能力を技能実習生が発揮できるような教育、さらには、技能実習生を受け入れる立場の人々へのコミュニケーション教育を行うべきであると考え。つまり、従来行われてきた文型積み上げ式を主とするテキスト主体の「日本語」教育だけではなく、現場で求められ、行われている言語活動を教育に反映させる重要性が示唆された。

8. 課題と展望

日本の漁業を支えるインドネシア人技能実習生に焦点を当て、言語使用の実態を明らかにした点において、本研究は意義がある。しかし、今後も技能実習生を中心に外国人労働者がますます増加すると考えられる漁業分野において、ひとつの事例だけでは全体像を明示することに限界があると考え。

船のエンジン音や波の音、機械音など周囲の騒音の影響を受けながら海の上で操業する点において、漁業分野の独自性がある。しかし、機械を使用するという点で言えば、農業分野や建設分野など、その他の就労現場でも同様であろう。本研究で示した騒音環境下における言語活動は、他分野にも応用できると考える。今後は、近隣地域の技能実習生や、異なる就労形態の技能実習生への調査など、事例を積み重ねて分析を進めることが課題となる。

本研究でエスノグラフィーの手法をもとに調査を進めたように、技能実習生の生活を内側から理解し、彼ら/彼女らの語りに耳を傾けることで、技能実習生の生活や、彼ら/彼女らを取り巻く言語環境も見えてくると考える。今後も日本社会において、協働し、ともに生きていく技能実習生が安心、安全な生活を送れることを祈念して、本論文を締めくくりたい。

(西村愛 にしむら あい ブラウিজヤヤ大学文学部日本文学科)

引用・参考文献

- 飯田朋子(2021)「技能実習生と日本語母語話者の協働現場及び日本語コミュニケーションの実態分析ー農業現場の実態に沿う技能実習生日本語教育のためにー」『日本語教育』180、pp. 33-48
- 岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波書店
- 奥島美夏(2005a)「特集にあたってーインドネシア人労働者の国際動向と日本の雇用構造における位置づけー」『異文化コミュニケーション研究』17、pp. 1-47
- 奥島美夏(2005b)「日本漁船で働くインドネシア人ープロフィールと雇用体系の変遷ー」『現文研』81、pp. 59-91
- 小田博志(2010)『エスノグラフィー入門』春秋社
- 企業日本語カリキュラム開発検討委員会(2008)「地域と企業の連携による外国人労働者のための企業内日本語教室における日本語教育カリキュラムについて」平成19年度文化庁委嘱事業、「生活者としての外国人」のための日本語教育事業(外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発)、財団法人浜松国際交流協会・企業日本語カリキュラム開発検討委員会
- 菊岡由夏・神吉宇一(2010)「就労現場の言語活動を通じた第二言語習得過程の研究ー『一次のことばと二次のことば』の観点による言語発達の限界と可能性ー」『日本語教育』146、pp. 129-143
- 佐々木貴文・三輪千年・堀口健治(2015)「外国人労働力に支えられた日本漁業の現実と課題ー技能実習制度の運用と展開に必要な視点ー」『水産振興』49(4)、pp. 1-66
- 助川泰彦・吹原豊(2009)「第6章 インドネシア人労働者の日本語自然習得 茨城県大洗町の事例から」奥島美夏 編著『日本のインドネシア人社会』明石書店、pp. 157-172
- 助川泰彦・吹原豊(2017)「インドネシア人技能実習生の受け入れと日本語教育」田尻英三 編著『外国人労働者受け入れと日本語教育』ひつじ書房、pp. 111-133
- 中川かず子・神谷順子(2017)「道内外国人技能実習生の日本語学習環境をめぐる課題ー受け入れ推進地域を事例としてー」『北海学園大学開発論集』99、pp. 15-32
- 中川かず子・神谷順子(2018)「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境:多文化共生の視点から考察」『北海学園大学開発論集』102、pp. 79-98

- 袴田麻里(1999)「コ・ソ・アの自然習得－工場内作業に従事するインドネシア話者の場合－」
『南山日本語教育』6、pp. 69-107
- 吹原豊(2007)「エスニックコミュニティの成立と発展－大洗町における定住インドネシア人共同体
の事例－」『地域文化研究』5、pp. 21-36
- 吹原豊(2021)『移住労働者の日本語習得は進むのか 茨城県大洗町のインドネシア人コミュニ
ティにおける調査から』ひつじ書房
- 真嶋潤子 編著(2021)『技能実習生と日本語教育』大阪大学出版会
- 松尾慎(2009)「ブラジル日系人の言語使用」野呂香代子・山下仁 編『「正しさ」への問い－批判
的社会言語学の試み－』三元社、pp. 149-182
- 箕浦康子(1999)『フィールドワークの技法と実際－マイクロ・エスノグラフィー入門－』ミネルヴァ書
房
- ミハイル・バフチン(1979)磯谷孝・斎藤俊雄 訳『フロイト主義 生活の言葉と詩の言葉』新時代社
- ミハイル・バフチン(1988)新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛 訳『ことば対話テキスト』新時代社
- 目黒潮(2005)「茨城県大洗町における日系インドネシア人の集住化と就労構造」『異文化コミュニ
ケーション研究』17、pp. 49-78
- 森山幹弘・塩原朝子(2009)『多言語社会インドネシア 変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』
めこん
- Bernstein, Basil. (1971). *Class, Codes and Control Volume1 Theoretical Studies towards a
Sociology of Language*, London: Routledge & Kegan Paul. (萩原元昭 訳(1981)『言語文化社
会論』明治図書)
- Sneddon, James. (2003). *The Indonesian Language: Its History and Role in Modern Society*,
Sydney: University of New South Wales Press.
- 水産庁『漁業をめぐる現状について(令和3年7月)』
<https://www.jfa.maff.go.jp/j/council/seisaku/kikaku/attach/pdf/210713-5.pdf>
(閲覧日: 2025年1月16日)
- 日本騒音調査ソーチャー「騒音値の基準と目安」
https://www.skklab.com/standard_value (閲覧日: 2025年1月16日)

Penduduk Indonesia, Hasil Survei Penduduk Antar Sensus 2010, Badan Pusat Statistik

注

¹ 農林水産省が水産業を営むすべての世帯や法人を対象に、5 年ごとに行っている調査である。漁業の生産構造や就業構造を明らかにすること、漁村、水産物の流通・加工業など漁業を取り巻く実態を明らかにすることを目的としている。

² 「漁業就業者」とは、ここでは、水産庁が示す満 15 歳以上で過去 1 年間に海上作業に 30 日間以上従事した者を指す。

³ 水産業の振興を図る目的で 1882 年に設立された、日本で唯一の水産業の総合団体である。外国人技能実習制度に関しては、漁船漁業職種及び養殖業職種における技能実習評価試験の実施や関連問題集の作成も行っている。

⁴ 国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)が開発したスマートフォン用の多言語音声翻訳アプリケーション。

⁵ 森山・塩原(2009)によると、インドネシア東部では、ある地域の優勢な言語が当該地域の「地方語」とされるのに対して、家庭内で使用される言語はそれとは別の言語人口の小さい言語である場合がある。本論では、上記を認めた上で、用語の混乱を避けるために民族集団の言語(ジャワ語、スンダ語、バリ語など)を指す用語として「地方語」を用いる。

⁶ 2020 年のセンサスでは、「日常語」に関する調査がなされなかったため、2010 年のデータを用いる。

⁷ 仲間の船。ここでは、X 丸と同じ「かに・えびかご漁業」の船を指す。

⁸ ノイズやサウンドを計測するためのアプリケーション。正式名称は「デシベル X-dBA デシベルテスター」である。

⁹ 船の上部一面に張った板部分のことで、デッキともいう。

¹⁰ 漁船で漁獲物をしまっておくところ。魚艙ともいう。